

1 麦類の生育状況と今後の管理について

播種以降、気温が高く推移したため、平年に比べ生育は早まりました。ビール麦の出穂のピークは、4月2日～4日と平年より1週間程度早く、小麦も同じく早まる予想です。また、低温による幼穂凍死は4月上旬時点で見られませんでした。

今後の気温は平年並～高い予報のため生育が早まると予想されます。明渠の点検・補修、赤かび病の防除、収穫作業を適正に行い、高品質麦の生産に努めましょう。

(1) ビール大麦

発芽勢の確保のため、適正な収穫作業を行いましょ。

◎早刈り厳禁

収穫適期：8割の穂首が90度以上曲がった頃（穀粒水分25%以下）

生育ムラがある場合：収穫日を通常の生育よりも1～3日遅らせるか、刈り分けを行いましょ。

◎適正な収穫作業

コンバインの掃除を徹底的に行いましょ。回転数は稲よりも1割遅くし、裂皮や剥皮が発生しないか確認しながら作業しましょ。

(2) 小麦

圃場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょ。

◎赤かび病の追加防除（2回目）

1回目散布（開花始）の20日後に2回目の薬剤散布を行いましょ。

同系統薬剤の連用は避け、収穫前日数に注意して薬剤を選びましょ。

佐野市において、播種直後、土壌中で出芽前の幼芽・幼根を「ヤギシロトビムシ」に食害され、出芽不良や生育抑制が目立つ小麦ほ場が見られました。

「ヤギシロトビムシ」は、夏は地表下15～40cmの土中に幼虫の状態では休眠しており、10月中旬頃から地表に移動し、有機物や幼芽・幼根を食べるような特徴があります。防除法として、以下のことが挙げられます。

○種子消毒

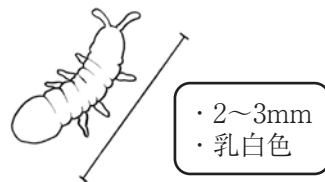
バッサ粉剤30DL（劇物）や、アドマイヤー水和剤（劇物）等による種子粉衣を行う。（令和3年4月7日時点の登録内容）

○早まき

遅まきすると発芽速度が遅く、食害に合う期間が長くなる。

○小麦から大麦に転換

発根が少なく、発芽・発根が同時のため小麦の方が被害は大きい。大麦は発根量が多く、発根後に発芽するため、根を食害されている間に芽が生育・出芽し、被害が回避される。



2 水稻育苗のポイント

浸種時間の目安

(1) 適切な浸種・催芽

・浸種は、積算温度100～120℃（消毒種子は120～130℃）程度で行ってください。

・低温備蓄種子はしっかり吸水させるため、浸種時間を1～2日長くとする。

・催芽は、28～30℃で18～20時間、ハト胸程度に均一になるようにする。

種子	水温13℃の場合の浸漬日数(積算温度)
未消毒種子	8～9日(100～120℃)
消毒種子	9～10日(120～130℃)
低温備蓄種子	9～12日(120～150℃)

(2) 適正播種量

播種は薄播き（箱当たり催芽粉130g）でがっちりとした苗を作らしましょ。

(3) 播種後の管理

徒長やムレ苗発生防止のため温度管理や、過剰なかん水に注意しましょ。

		展開後1～4日(緑化期)	5～15日	15日～
温度管理	日 中	18～25℃(30℃以上にならない)		
	夜 間	10℃(最低5℃以上)		5℃～7℃以上
かん水	かん水量	2日に1回 極度に乾燥した時以外は控える	1～2日に1回 控え目のかん水に努める	1日1回 午前中十分に
	注意事項	<ul style="list-style-type: none"> かん水量が多すぎると苗が徒長し、根の生育不良を招く。 低温時のかん水は午前中に行い、夕方のかん水は行わない。 夕方、苗箱の表面が乾く程度が最適です。 		晴れの日はたっぷり、曇りの日は控えめに。

(裏面あり)

3 いもち病の防除について

令和2年産は、7月の低温・日照不足によりいもち病が多発し、特に移植時期の遅い「あさひの夢」で被害が増加しました。

いもち病の防除は、種子消毒や箱施用剤で予防効果が高く、本田で防除する場合は、発生予察情報（栃木県農業環境指導センター BLASTAM）を参考にして、適切な時期に実施することが重要です。

○いもち病に適用がある箱施用剤

（令和3年4月13日時点の登録）

農薬名	使用量	使用時期	使用回数	使用方法
フジワンプリンズ 粒剤	育苗箱1箱当たり50g	緑化期～移植当日	1回	育苗箱の上から均一に散布する。
ビームパディート 箱粒剤	育苗箱1箱当たり50g	移植3日前～移植当日	1回	育苗箱の上から均一に散布する。

※上記2剤とも別途イネ縞葉枯病対策を検討する。

4 稲こうじ病の防除について

イネ稲こうじ病は籾に暗緑色の病粒を形成する病害で、この菌による被害粒の混入が確認されると農産物検査で規格外になってしまいます。病原菌は土壌で越冬するため、以前発生した圃場では防除を行いましょう。また、多肥栽培で発生が助長されるので、適正施肥を行いましょう。

○移植期の防除薬剤（ともにシメコナゾールを含む）

（令和3年4月13日時点の登録）

農薬名	使用量	使用時期	使用回数	使用方法
トリプルキック 箱粒剤	育苗箱1箱当たり50g	移植3日前～移植当日	1回	育苗箱の上から均一に散布する。
モンガリット 粒剤	3～4kg/10a	収穫45日前まで	2回以内	湛水散布

※シメコナゾールを含む農薬の総使用回数は2回以内（移植前は1回以内）であることに注意。

※トリプルキック箱粒剤はウンカ類に登録がないので、別途イネ縞葉枯病対策を検討する。

※モンガリット粒剤を移植期に使用する場合、移植直後～10日が処理適期である。